

〔総括〕

和華蘭文化の再定義

姫野 順一

〔Summary〕

Redefinition of the complexity among Japanese, Chinese and Dutch Cultures

HIMENO Junichi

講師の先生方、ありがとうございました。本日は、和華蘭文化を考えるというテーマで研究集会を開催させていただいております。くしくも、開港以来450年、記念となる年でございます。新長崎学研究センターでは、今回、過去の研究集会の成果を引き継ぎながら、「和華蘭文化を考える」のサブタイトルは「異文化の融合あるいは共存」というふうにさせていただいております。きょうの研究集会は録画をして、オンデマンドで後ほど公開するというので、先生方には、会場はできる限りの範囲で来ていただいているという状況で開催しております。

まず、最初の定義に関して、異文化の融合あるいは共存を考える、長崎の文化特性というものはどういうものであるか、というようなことで発題させていただき、各講師の先生方には見事に応えていただきました。私なりに受け止めながら、若干コメントをしてみたいと思います。まず、テーマの和華蘭文化。これは私が40年くらい前に長崎に来た時は、まだ言葉としては定着していません。実に、和と華と蘭が混じった長崎の特質をうまく表現してるというので、それからだんだん和華蘭文化ということが言われだしました。その前はそのようなことを表現する言葉として、「ちゃんぽん文化」みたいな言い方もあったわけですが、とにかく長崎にはいろんな文化が雑居的に併存しているという特色があるということは、常に言われていることであろうと思います。これについてはいくつかの次元で考える必要があると思います。まず、歴史的な背景というのがあります。この歴史的な、取りあえず450年間というふうなことで見た場合に、いろんなひだが時系列的に形成されてきたということがあります。

時系列的に形成されていながら、空間的にこれが同居するというのが長崎の特性と考えることができるだろうと思います。

私もこれまで、写真分析でありますとか、テレビの番組作りでありますとか、長崎学というふうな枠組みで研究をしてきて、つくづく長崎について思うことは、異域長崎、「異なる領域」ですね。異領域というふうなことを大変強く感じるわけでございます。この歴史的、時間的な空間というものの長崎と、もう一つの次元としては、長崎は二つの住民の混成であったということを考えておく必要があると思うんです。つまり、長崎は、定住する人たち、すなわちフランス語で言いますとセダンテールと、流浪する人たちのノマド。この定住民と移動民の二つのタイプの人から成り立った街というところが、大変重要であろうと思います。なぜそのような性格になったかといえば、それはひとえに港町であったからであると思います。港町でなに故そうなったかというの地勢学はここではいちいち申しません。そのおかげで、非常に多面的に文化が、さまざまな異国からやってきています。接触をし、反発をし、あるいは役に立つものは取り入れる。融合するというふうな側面だけではなくて、反発しながら、場合によってははじき合いながら、融合しながら、あるいは併存しながら空間が成り立っている。そういうものが長崎ではなかろうかと思うわけです。それともう一つ、そのような文化を考える場合に、長崎が中央にとって辺境であったということ、それは先ほど、水嶋先生のお話にもあった、国というふうな枠組みの中では、日本の国の中では、外れにあった。しかし港町としてはインターフェースで外国との、日本の中にあって日本にないような特性を持つという場所になったという、その辺境性と、国家に対してはかなりそれが反対局面の文化共存を持っているところです。以上申し上げたことが、差し当たり大きな枠組みではないかというように思うわけです。

以下、講師の先生方に即して若干申しますと、山川先生のご報告の中で、私、つくづくそういうふう思うわけでありまして、やっぱり長崎の特性を背景として踏まえて、映画が成り立ち、物語が成り立っているなど思うわけです。そのことを簡単に言うと、これは水嶋先生もキーワードで拾い上げたことに関係するわけでありまして、炭鉱、キリシタン、出島、あるいは半島・離島、あるいは原爆、あるいはおくんち、それから居留地。こういうふうなものが物語の背景にあつて、絵になりやすい場所であるというふうなことで、類いまれに長崎のロケが、あるいは映画の聖地が多いという理由がそこに潜んでいるのではないかと思います。そういう意味では、長崎の記録、長崎の記憶というものは深く、広く、人に訴えかける素材があるということではないかと思うわけです。

そのことが、水嶋先生がご報告いただいたことにも盛り込まれていたわけでありまして、先生は遺跡、史跡の意味、それから、世界遺産条約などの遺構、あるいはヘリテ

ジというようなことの歴史をお話しいただきました、制度、あるいは法によって定義しながら守っていく必要が、一方であるわけでありますが、その背景には、その痕跡をしっかりと検証していくということがあります。ひとえに、長崎の場合、史跡にしても遺跡にしても、その痕跡の特色は大変大きい。世界史的な事件を背景にして、大きく、深さがあり、広がりがあります。これを、私の言葉を引いていただいたんですけど、「世界史の中の長崎」と、「長崎の中の世界史」と言っていました。長崎の持つ精神文化の奥深さ、あるいは私も随分昔に、そのタイトルでシンポジウムをやったことがあるんですけども、「長崎の光と影」というようなもので表現できるような長崎の文化の特性があるのではないかと思うわけです。

同じようなことは王維先生の報告の中にも見られました。熱くて長い中国との交流を一手に引き受けてきたのが長崎であります。それ故、唐人屋敷、新地はもちろんのこと、在住する唐人の皆さんとの交流の中で、唐寺が生まれ、そして明清楽が長崎に流れ込み、その明清楽が非常に多様な、日本における習俗、芸能として伝播をしていくというような側面を持ちます。有形的には唐寺とかが目立つわけではございませんけれども、無形的にはランタンフェスティバル、あるいはおくんちの習俗の中にも入っていきます。精霊流しの文化の中にも流れていまして、長崎らしい文化を形成しているというふうに思うわけであります。また、多面的な多様な食べ物文化というようなものにも、表現されているところではないかと思えます。私も、熊川哲也さんの『マダム・バタフライ』のパレエの制作に協力したことがありますが、やはり、世界史的なレベルに耐える悲劇性、喜劇性というようなものがそこにあります。

大体、私のお話する時間が、あと1分残されてるわけですけども、以上見てきましたようなことを考えて、私に振られた、長崎の和華蘭文化を再定義するというようなことを受け止めて、どういうことが言えるか。もう先生方がつとに言われたことでありますけれども、長崎のそのような文化の痕跡の大きさ、深さ、広がりというようなものの持つ、多様性というものを、今、新しい時代、あるいは新しい世界の関係の中に、どういうふうに発信するのかということが大きな課題であります。一つは観光というテーマがあります。もう一つは世界史の中の多様性を持つ長崎としての、世界に向けたアピール。一言で言えば、平和と文化共存というようなことを、長崎からどのようにしてメッセージとして発信できるのかと、そういうことが問われてくるのではなかろうかと思えます。大体、私の持ち時間でございます。以上、問題提起をさせていただきます。

問題提起を受けて

山川：

姫野先生ありがとうございます。僕はそもそもアメリカが専門で、長崎のことはどれほど語れるかというところなのですけども、今、指摘されたように、水嶋先生の中にも出てきました、「世界の中の長崎」、「長崎の中の世界」というのは非常にキャッチフレーズというか、フレーズとしては、うちの大学もそういうキャッチフレーズを名乗ってるわけですが、これは非常に分かりやすいフレーズになっているのかなと思います。先ほど、水嶋先生が歌、『長崎の女』を紹介されたのですが、実は『Nagasaki』っていう歌があるのです。1920年代ぐらいに作られた古い歌で、ミルス・ブラザーズとか、キャブ・キャロウェイとか、その時代、けっこうなスターだった人が歌っている歌なんですけれども、そういった『Nagasaki』っていうスペルで書いて、すぐに世界中の人がイメージできるような都市というのは、もちろん京都とか東京とかいうのはあると思いますけれども、日本の中ではなかなか見当たらない。長崎は世界の人が認知できるような特異な場所っていうのが、実は非常にまれなことなのだと思います。こういう役割をいただいて、ちょっとかじっただけなんですけど、それだけでも、長崎は物質的にも精神的にも非常に奥深い場所であるということが分かったというのは、今回、参加させていただいて非常に収穫だったなというふうに思います。

さらに『Sukiyaki』って歌があるんですけども、もちろん『上を向いて歩こう』っていう歌の海外でのタイトルが『Sukiyaki』なんですけど、『Sukiyaki』っていうタイトルで、インドネシアのグループ、ブルー・ダイヤモンドってグループがいて、その人たちが、『Sukiyaki』って歌を歌ってるのです。メロディーはもちろん『上を向いて歩こう』なんですけれども、中身は、長崎ですき焼きを食おうっていう内容になってるんです。非常に珍しい内容の歌になっていて、長崎っていうのは言葉だけで非常にグローバルなポジションを獲得してるっていう、やはりまれな都市であるということで、そのまれな都市っていうことを、先ほど、姫野先生も最後におっしゃりましたが、どう発信していくかというのが、今の長崎に課せられた、やはり大きな課題であるなというふうに思いました。

水嶋：

姫野先生がおまとめの中で、この異文化との接触とか反発、受容、変容、融合という一連の流れを簡潔にご説明いただきました。少なくとも長崎にある異文化の技術的なことに関して言えば、例えば、眼鏡橋のような物は、恐らく反発というのはなかったのではないかなというふうに聞いて思いました。それは川を渡るという本来の橋の

技術的な目的が、長崎人にとって、あるいはお寺に行く途中において、非常に、日常の道具になっているため、少なくとも、技術的なことが輸入されれば反発ということではなかったのではないかなと思います。私のスライドの中に、平戸のザビエル教会、1枚載せましたけども、隣にあるお寺さんとかそういうのを見ましても、恐らく精神的には反発的な気持ちはあったのかもしれませんが、少なくとも、おくんちの奉納踊だとか、唐寺だとか、オランダ船のおくんちの山車みたいな物を見ると、少なくとも受容なり変容なりしている。共存というのか、融合というのか、そういうことを一言で言うのは難しいですけども、お互いに認め合っている。私がおこに来て、感じたことは、共存、共栄という他に、新しい文化を作り出そうという意味で、共創、新しくクリエイションする、「共創」ということが、日本の地方都市に比べて非常に強かったのではないかなと思います。それは王先生が最後にランタンフェスティバルの例をお話してくださいましたけれども、日本人社会と華人の間に新しい観光資源を作り出そうと。それはうまくいってるけども、立川の場合はうまくいかなかったと。それは共創の精神がなかったからではないかなというふうに思って聞いておりました。以上です。

王：

ちょっと簡単に、言わせていただきます。さきほど姫野先生のお話の中に、中央と辺境という話がありました。中心と辺境は長崎の歴史の中にもありました。江戸時代は長崎が中心であって、明治以降、長崎は今、現在のように地方の地方になってしまいました。私は長崎の文化が持つ多様性に引かれて、長崎の調査も始めていたわけですが、実際長崎で仕事し生活してみましたら、長崎はとても多様性がある一方で、強い保守性があることを感じました。実は長崎の地域性をもっと活かしてほしいという期待が、私の中にはあります。つまり、東京と北京との外交的關係のような交流よりは、むしろその下の、長崎と福建のような、民間レベルの交流が重要ではないかと思えます。かつて中心であった長崎では、唐人貿易によって経済利益が得られ、繁栄がもたされましたが、現在なくなっています。しかし、400年以上の歴史がある文化は残っています。今も長崎の地域資源として根づいています。これはとても大事なことです。文化はいかに重要であるかということをおこはつくづく思えます。文化は地方都市である長崎の再生や地域間交流を通じて中央（日本東京）に影響を与える重要な媒介であると信じています。長崎の地域性を生かし、地域間の交流をいかに重視しながら、新しい長崎をつくっていくというのが大変重要ではないかと思えます。

姫野：

関連してよろしいですか。今、お話を聞いていて、いくつかのことを思い付くことがあるんですが、まさに水嶋先生が提起されてたように、つなげる力、つなげる機能というものについて、どう考えるかということが大きいと、こういうことだと思うんです。その場合、今言った、福建とのつながりと言われましたけれども、キーワードとしては、ネットワークということをやはりちゃんと考えておかないといけないということだと思います。そういう意味で言えば長崎は、ハブだったわけですね。スポークのところ、いろんな枝葉を持つてるわけですね。その枝葉について、まずは国内についても長崎は中心でありますけれども、周辺、離島、半島、あるいは、平戸、島原、五島、天草、あるいは周辺の福岡や熊本とのネットワークの中で成り立っていて、その上に、海路、船の航路により、物流が、北前船とかというところにリンクしていきますし、江戸との関係は奉行を中心に、かなり中心的に研究されている部分がありますけれども、そういうネットワークの物流だとかいうのは、案外、研究されてないんですよ。ということで、国内についてもそのことを強く最近は思っているところですが、国際関係もそういう意味での枝ですね。私はちょっとこのテーマに関して、違和感があって、オランダと中国と日本、和華蘭だけでも、もっと言うと、和華西蘭、つまりスペイン、ポルトガルを入れて、それから英米文化も含む、多面的な側面を表現するんじゃないかと思っています。また考えてみると、奥船と言われたベトナム方面、東南アジア、あるいは航路を通じてインド、アフリカのほうとも交流があったわけでありまして、そういう意味でのサブのサブ、そういうネットワークの視点でもって、やはり「つなぐ」というコンセプトで、メッセージとしての平和なり、文化共存というのも、そこの関連で発せられるべきではないかというふうな感想を持ちました。以上です。